

2021年12月17日

## ラグビー部の「周到的準備、そして自信と誇り」

立命館慶祥中学校・高等学校

校長 江川 順一

12月17日は冬休み前の全校集会でした。この時、高校の全校集会において私が話したことに基づき、ここではもう少し丁寧に、高校生のあなたと一緒に考えてみたいと思います。

今年最後の全校集会に当たって、お話を2つします。

まず、1つ目、「コロナと国内研修」です。

新型コロナウイルスの新規感染者は、昨日現在、北海道で12名、国内では190名となりました。一方、WHOの昨日の発表では、オミクロン株は、世界の殆どの国に感染が広がっています。日本政府は、オミクロン株の水際対策強化を行い、国内での感染拡大を食い止めようとしています。コロナへの対策。これは、相変わらず予断を許さない状況にあります。

この夏からのコロナの状況を振り返ってみます。8月20日に過去最多となる約26,000人の新規感染者がありました。9月30日には緊急事態宣言が解除。この時の新規感染者数は1,600人弱。

これ以降、新規感染者はぐっと減少の一途をたどりました。これらの状況を受け、立命館学園は、学校行事を平常時に準じる対応を行い、中2と高2の研修を実施しました。

中2の京都研修は、10月中旬で実施。研修テーマは「世界に誇れる日本を探す旅—京都で学ぶ日本のすばらしさ—」としました。内容は、立命館大学でのキャンパスツアーと体験授業です。京都・滋賀コース別自主研修9コースをあわせて実施しました。

また、高2の国内研修は、10月から11月にかけて実施。海外研修の実施を断念し、選択型国内研修としました。皆さんからコース案を募集、そして、提案者自らが高2の皆さんにプレゼンして投票を行いました。その結果、東北、石川、関西、瀬戸内、九州、座間味島、八重山諸島、屋久島・種子島の8コースを設定し実施しました。このプログラムは、国内での代替研修として、まさに1から練り直したものでした。

ともに、出発前にPCR検査を実施し、参加者全員の陰性を確認して出発しました。公立学校にはない、念には念を入れての対応です。

昨年度のちょうどこの時期、校長として、すべての研修について、延期の末に中止という切ない決断をしたことを、昨日のこのように思い出します。だからこそ、今回は行うことができ本当に良かった。

研修旅行のために、事前の準備をたくさん、たくさん重ねてきた皆さん、本当にお疲れ様でした。その思いは、皆さんとともに準備に真剣に、そして懸命に取り組んできた教員も一緒です。

そのことを改めて確かめて、生徒の皆さんの、そして先生方の労苦をねぎらいたいと思います。

年明けには、中1の二セコへの北海道研修、中3の大分・長崎・福岡への九州研修を予定しています。これらの研修も無事実施できることを期待しています。

次に2つ目。「クラブ活動」です。

この秋、クラブ活動が一挙に再開しました。昨日も、高校演劇部や中高合唱部による公演が開催されるなど、冬休み前に多くのクラブが発表会を企画しました。

「百花繚乱」という言葉があります。種々の花が美しく咲き乱れるという意味です。体育系、文化系のあらゆる活動が一挙に花開き、百花繚乱の趣となった感がありました。百花繚乱は、転じて、すぐれた業績や人物が一時期にたくさん現れることのたとえでもあります。このことを象徴するかのよう、この秋、慶祥ラグビー部の活動に注目が集まりました。

皆さん、札幌山の手高校を知っていますか？ ラグビー日本代表のキャプテンとして2年前のワールドカップ日本チームを率いたリーチ・マイケルという選手の名前ならば聞いたことがあるでしょう。彼は、札幌山の手高校の出身です。そうです、山の手は、ラグビー部の強豪校として有名なのです。

山の手は、22年連続で札幌支部大会を制し、全道大会でもいつも優勝、全国大会の花園（野球の甲子園）へ出場していました。山の手は、北海道のラグビー界にあっては、外に並ぶ者のない、無敵の強さを誇っています。その山の手に、10月の新人戦札幌支部大会において、慶祥ラグビー部は10対7で見事打ち破りました。慶祥ラグビー部が、支部大会を制し、全道大会に進出したのです。これは、快挙でした。

札幌支部大会において、山の手が負けたのは、実に23年ぶりのことです。そして、慶祥ラグビー部が、山の手に勝ったのは、創部以来初めての出来事でした。

もちろん、この勝利の裏に、慶祥ラグビー部が綿密な計画を立て、周到な準備をしてきたことが原動力になったことは言うまでもありません。立命館大学ラグビー部のコーチらが続々と来校し、何度も指導を受けたりもしました。「望ましい結果は、突然奇跡として起こるのではなく、起こるべくして起こる」のです。

このことは、私たちの生き方にも示唆を与えてくれる好事例です。

あなたは、普段から「自分にとって、これは無理だ」と最初から諦めてはいませんか。目標に向かって、「周到な準備をして臨み、自信と誇りをもって」徹底的に努力したならば、勝利を勝ち取ることができることを、慶祥ラグビー部が改めて教えてくれました。

さて、ラグビー部のその後です。

11月の全道大会では、山の手に12対14の僅差で敗れました。実に2点差で、慶祥ラグビー部始まって以来の、全国大会初進出を阻まれたのです。しかし、もう山の手は「圧倒的な王者」ではありません。そのことを一番実感したのは、間違いなく対戦した慶祥の選手です。今回の山の手戦での勝利と惜敗の経験は、選手に大きな自信と誇りを与えました。来年9月の花園予選までの10ヶ月間、選手たちは、長くて辛い練習を乗り越えていくことができると確信しています。

私は、慶祥ラグビー部の鮮やかな活躍をもって、皆さんの活躍を想像し、大いに期待しています。「周到な準備、そして自信と誇り」をもって、事に当たってください。

とりわけ、3年生の皆さん、大学入試に備える者、学内進学課題研修に備える者、各自の進路はさまざまだと思いますが、悔いのない取組をすべく、この冬休みを大切に過ごしてください。

キーワードは、「周到な準備、そして自信と誇り」です。皆さんの活躍を期待しています。

高3SP、他大コースの皆さんは、登校の機会が殆どありませんが、全力を尽くすことを祈っています。

高1・2の皆さんと、高3Rコースの皆さんについては、年明けに、再び皆さん全員が揃って、元気な姿を見せてください。

以上、応援団長の江川校長からのお話でした。